

漢方の待合室

No.11
2004 MAY

熱 傷

熱傷とは？

熱傷は熱、放射線、化学物質、電気との接触によって、皮膚および深部組織が細胞死や蛋白の凝固・炭化を起こす組織損傷のことで、火傷とも呼ばれます。多くは身の回りにある熱湯や炎によるものですが、日焼けも放射線熱傷の最も一般的な例として挙げられます。

熱傷の重症度

熱傷の重症度は、受傷面積と深度によって決められます。成人の場合、受傷面積は「9の法則」を用い、頭部および頸部9%、体幹前部18%・後部18%、腕各9%、下肢各18%、性器および会陰部1%で算出します。また、深度は1～3度の3段階に分類

されます。

【1度】表皮のみで赤く腫れてヒリヒリした痛みがあり、数時間から数日で跡形なく治癒します。通常の日焼けもこの範囲になります。【2度】真皮に達しており、程度の浅いものと深いものがあります。水疱を生じる場合が多く、時間を経てから生じることもあります。浅いものでは感染症を起こさなければ跡が残ることは少なく、1～2週間程度で治癒しますが、深いものでは瘢痕の残ることがあり、治癒に3～4週間以上を要します。また、受傷面積が大きいとショック症状を起こしたり、命に関わることがあります。【3度】皮下組織にまで達し、受傷部表面は白いか、酷い場合には炭化して黒いこともあります。神経も破壊さ

れているので痛みを感じることは少なく、治癒に数ヶ月を必要とし、治癒後にも目立つ瘢痕が残ります。受傷面積が大きいと2度以上に命に関わります。

治療方針

受傷直後の応急処置は、とにかくまず冷やすことです。水道水などのきれいな流水が最も適していますが、氷水で冷やした清潔なタオルや氷嚢類でも代用できます。とくに広範囲を冷やす場合は、体温が下がりすぎないように注意します。

その後、程度が浅く小範囲のものは自己治療で十分対処できますが、広範囲なものや2度以上の熱傷、受傷部が感染症を起こしたものは医療機関での治療が必要となり、程度や部位によっては入院治療を行います。

今日の漢方処方.....紫雲膏《外科正宗》

江戸時代の名医“華岡青洲”創案の軟膏で、外用漢方薬の代表です。主薬の紫根と当帰が、血行を改善し肉芽形成を促進させかつ炎症を鎮めるので、ひび、あかぎれ、しもやけ、皮膚炎、痔疾患、褥瘡に効果があります。また抗菌作用も有するため、切傷や火傷、水虫にも利用できます。紫根の赤紫色が大変強いので、衣類などへの付着には注意が必要です。

紫雲膏の構成生薬

ゴマ油	シ 豚 脂
ミソロウ	ウ 当 帰
	シ 紫 根

紫 根

紫根はムラサキ科の植物 ムラサキの根で、その名の通り紫色色素の shikonin, acetylshikonin 等を含み、もともとは染料として用いられていました。古来より高貴な色として珍重され、中国では紫根染めが大流行したそうです。日本へも古くから栽培法が伝わり、《続・東大寺正倉院文書》に紫草園の経営が記されています。染色の歴史も古く、椿灰または榊灰で媒染し、天平時代には青みがかかった古代紫が、江戸時代には赤みがかかった江戸紫が染められました。



栽培品は専ら染料として利用され、薬用に供されることはありませんでしたが、次第に外傷や皮

膚疾患、炎症性疾患に用いられるようになりました。その有効成分は先程の紫色色素であり、肉芽形成促進作用、抗炎症作用、抗菌作用が認められています。

漢方処方としては、紫雲膏が有名で常用されています。作り方は、ゴマ油を鍋に入れて加熱し、ミソロウと豚脂を加えて溶かします。次いで紫根と当帰の刻みを加え、赤紫色になるまで抽出し、熱いうちに濾して残渣を取り除き、冷やし固めて出来上がりです。薏苡仁末を加えれば、いぼ、魚の目、たこなどにも応用できるでしょう。